

雑記抄

御お気きに入いり

何方どなたにでも「御気に入り」の相手や物品があるうが、なかでも愛用・愛好・愛読の図書（記事や漫画本も含める三品）は必読の書といえそうである。

私の好きな悪字：辰濃和男（たつのかずお）「岩波現代文庫二〇〇二年発行」漢字の楽しみ方・悪字の数々を弁護する、を改題）の単行本を手元において読み返している。自分で言うのもなんだが、正に「のしいかの味」が染み出ているのである。

辰濃さんは、「自分が求めている拠より所が次第に見えてきた。あまり歓迎されない悪字をこそ、未来を切り開く手助け」（抜粋）と言われ、例えば、

迷：迷うことで自分を鍛えたという勝海舟。「武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない」といったのは国木田独歩。「いまが男盛りじゃ。迷路のまっただ中じゃ」とは八十四歳で

もい土を探して山野をさまよい歩いた陶芸家の加藤唐九郎だと紹介されておられる。

老：本当に醜いのかと問われ、老後・老骨・老残などとなり、老人という言葉が否定的に使われるのと、

「老いは醜いもの」という見方と無縁ではないだろうと。「高齢者はふえるが、老人（笠智衆みたいな人）が減っていく」とは旭川で記念講演された作家の村松友視さん。

無：「貧乏したけりやあ腕を磨け」とは大工の棟梁さん。金が有るよりは無いほうを選べ、つまり、名人は貧乏覚悟の赤字でもいい材を選んで仕事をするので、「したくなけりゃあ」ではないという。端的には、無一物無尽蔵であり、



老子のいう「万物の妙」と。

大阪おばちゃんが行く：道新連載の上村悦子（うえむらよしこフリーライター）さんのスクラップを常置。正に熟読玩味がんびではある。とにかく、「おばちゃんには知らんぷりの不機嫌、おばちゃんにはいくつになっても即答の上機嫌」なのが大阪のおばちゃんとか。取り上げる主題がやさしくて、ユーモアで、あの独得の大阪弁丸出しが何とも言い様のない親しみが溢れ

出ている、一気に読んでまた読んでスクラップに貼付するのが日課となつてしまった。

上村さんは本当に上手な大阪弁をも

の見事に会話に盛り

込み、「ほけとつっこみ」の正に絶妙なりズムを感じとらせてくれるのである。「…へんねん、…やわあ、…あかんのちゃう：…と際限なく飛び出すコトバ・ことば・言葉のオン・パレードで「もうどうにも止まらない」のが木曜

日。

ほのぼの君：佃公彦（つくだきみひこ）さんが日本漫画家協会大賞受賞記念出版の「ありがとうほのぼの君」も日常的で、ほんわかな子ども時代がよみがえってくるマンガである。

癒いやしの漫画詩集としての道新連載は二〇〇八年（平成19・3・8）の一三〇一四号が「最終回ありがとう!!」で、佃さんの金字塔は「ちびっこ紳士」から三十七年の長期連載となつた。

病気で絵筆が握りにくくなったためとはいいながら、コマ毎に展開される優しい絵や文の中に暮らして光る一隅（卓上四季）が輝き続いたのである。

佃さん、ありがとう。ほのぼの君、さようなら。

お疲れさま 公彦さん!! さて、迷●に言●べんが●つくと●謎●となり、老人も廊人（病院・施設の廊下）や朗人となり、さらには「新聞マンガ」に夢中になる日々、東川町文化交流館の図書と和みと「心の栄養」をと思うが、さてさて、町の風はどうだろうか。

（前）中央分館長

尾池隆男